令和５年９月７日

令和５年度 氷見市教育総合センターだより 第４報

「ENGLISH セミナー2023」　７月２７日（木）

市内小学校・義務教育学校の２５名の６年生が、主体的に英語を用いて、愛するふるさとを紹介する「ENGLISH セミナー2023」に集いました。

第一部の「ALT タイム」では、小学生が英語のクイズに答え、ALT について楽しく知ることができました。また、チームに分かれ、知っている英単語で答える「The Picnic Game（ピクニック・ゲーム）」を行い、参加者相互の交流を深めました。第二部の「プレゼンテーション」では、各々が準備した写真を活用し、国内や氷見市内に関する「ALT におすすめの場所や食文化等」を英語で紹介しました。発表者は、聞き手に伝わりやすいよう、ゆっくりと明確に、ときにはジェスチャーを交えてプレゼンテーションを行い、日頃の外国語科での学習の成果を発揮していました。

学力向上研修会　７月２８日（金）

テーマ　新学習指導要領　算数・数学科　改訂のポイント

講　師　国立教育政策研究所　教育課程調査官　笠井　健一　先生

研修会では、学習指導要領　算数・数学科の改訂のポイントとして、学習内容、学習指導の改善・充実について、具体例を示しながら教えていただきました。

「内容」に関しては、育成を目指す「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」がより明確となり、それらを育成するための学習過程の改善が図られるよう、どのような「数学的な見方・考え方」を働かせて数学的活動を行い、どのような「知識・理解」及び「思考力・判断力・表現力等」を身に付けることを目指すのかを教師が明確にして授業改善することについて、新たな視点や気付きを得ることができた研修会となりました。

＜主な講演内容＞

○いろいろな友達と問題を解決していくことのよさを味わうこと → 協働的に学び合える場の工夫
○「分数のわり算」の計算の仕方を説明すること → 「思考力・判断力・表現力等」の育成
○振り返りでは、分かったことから、次に考えたいことを問うこと → 統合的・発展的に考察する力の育成
○子供がつまずいているところを、教師が問い返すこと → 分からない子供への配慮
○単元のゴール、授業のゴールの姿を、具体的な子供の姿で捉えること → ねらいの焦点化

＜参加者の声＞

○「先生は、説明したいのをぐっとこらえて質問する」「ねらいを焦点化すると学び合いがうまくいく」「自力解決の場面では、誰がどこまで分かっているかを把握する」など、思考力を高める授業づくり、授業改善につながるお話をたくさん聞くことができた。
○授業も授業後の協議会も「子供が、今日のねらいを全員達成できたかどうかに視点をおいて評価する」ということが、心に残る言葉だった。

理科教育講座（自然観察）入門コース　７月３１日（月）

午前中、九殿浜海岸で、小学校チームは砂鉄の採集を行い、中学校・特別支援学校チームは海岸にある地層を観察し、岩石を削って採取しました。その後、灘浦小学校の理科室で、小学校チームは、砂鉄を利用した教材づくり、中学校・特別支援学校チームは、電子顕微鏡を使って、地層に含まれている珪藻等の観察を行いました。

午後からは、乱橋池に移動し、天体望遠鏡を用いた太陽の観察の仕方を学び、実際に観察をしました。また、乱橋池に生息する動植物の観察もしました。その後、矢田部の露頭に移動し、地層の観察とスケッチを行いました。

＜矢田部の露頭＞

教育セミナー　　８月１日（火）

テーマ　　主体的・対話的で深い学びを教室で実現するために
～　一人一台情報端末活用も踏まえて　～
講　師　　岐阜聖徳学園大学　教育学部　教授　玉 置　崇　先生

今では、氷見市の教育現場になくてはならない「C4th」を考案された玉置先生をお招きして、教育セミナーを開催しました。

玉置先生は、「主体的に」「対話的に」「深い学びに」を数値的に評価する難しさを説かれ、エビデンスよりもエピソード（子供たちの具体的な姿）で語ることの必要性を力説されました。また、教師は、児童生徒が心理的な安心感を抱くことができる教室・職員室づくりに努めるとともに、子供と子供のつなぎ役となり、対話のよさを実感させる授業等を行うことが大切だと話されました。

一人一台端末を、対話を成立させる道具の一つとして活用したり、協働的な学び・主体的な学び、振り返りの深化等のために利用したりすることの可能性も示唆してくださいました。

＜参加者の声＞
- ○玉置先生のお話を通して、子供たちが「アウトプット」を多くできる授業、子供たちの考えがつながっている授業を目指していきたいと思った。
- ○指導の評価として、数値(エビデンス)に一喜一憂しがちであるが、数値だけでは測れないものがあることや、子供の具体的な姿(エピソード)を重視することの大切さを教えていただいた。
- ○ICT を使って子供同士をつなげる方法や、ICT を活用した学習と対話的な学習を融合させる授業の進め方を、具体的に学ぶことができた。

ふるさと教育研修会　　８月４日（金）

内　容　　氷見市立博物館見学、富山県栽培漁業センター見学、ひみラボ水族館や仏生寺川での体験ワークショップ等
講　師　　小谷博物館長、文化振興課 西尾主査、富山県職員 飯田氏　等

本研修会は、郷土に対する理解を深めるとともに、教材としての活用方法を探ることを目的として毎年実施しているものです。

博物館では、小谷館長に解説していただきました。ＮＨＫ朝の連続ドラマ「らんまん」のモデル牧野富太郎博士が、十二町潟のオニバスを視察に来られたときの写真や色紙・資料等がタイムリーに展示してあり、参加者は、興味深く見入っていました。

４月にリニューアルオープンした県栽培漁業センターでは、魚に関するゲームや魚と触れ合う体験等を楽しみ、参加者の笑顔が広がりました。

ひみラボ水族館では、胴長を着用して仏生寺川に入りました。歓声をあげながら、暑さを忘れるほど夢中になって活動しました。参加者は、体験を通して氷見のよさを味わっていました。

＜体験を通して氷見の魅力に浸る参加者＞

＜参加者の声＞
- ○栽培漁業センターで見たクロダイは、６月の学校給食で活用した魚である。また、博物館で学んだ米作りの一連の流れは、育てる人々の苦労が伝わるものであった。日々の生活に通じることがたくさんあり、とてもよい経験になった。ここで学んだ氷見のよさを、栄養教諭として学校給食や食育活動に生かしていきたい。
- ○施設の方々の氷見愛に触れ、より氷見が大好きになった。物事を愛することが、人に伝わりやすくなることにつながるような気がした。子供たちにも氷見をより愛してもらいたい。

生徒指導研修会　　８月８日（水）

テーマ　　生徒指導提要（改訂版）の理解と活用
講　師　　東京学芸大学　教育学部　准教授　伊藤　秀樹　先生

昨年の 12 月に、生徒指導提要が 12 年ぶりに改訂されたことを受け、改訂された経緯や、その内容等について理解を深めるとともに、児童生徒との関わりの中で、どのように活用すればよいかを学ぶために、生徒指導研修会を開催しました。

講義では、生徒指導の定義が、「児童生徒の成長と発達を支える生徒指導となっていること」、また、生徒指導の目的は、「児童生徒が社会の中で自分らしく生きる存在となること」であり、全ての児童生徒が対象となること等をご教授いただきました。生徒指導を実践する上で、４つの原則（『差別の禁止』『児童最善の利益』『生命・生存・発達に対する権利』『意見を表明する権利』）を重視することの大切さについても、具体的な事例を挙げながら、丁寧に説明してくださいました。

いじめと不登校に関して、その理解と対応についても教えていただきました。そこでは、改めて安全で安心な学校・学級づくり、居場所づくりの大切さを確認する機会となり、児童生徒との関わりに向けて、新たな心構えを身に付ける場ともなりました。

＜参加者の声＞
- ○今の時代は、児童生徒を「統制」するのではなく、「支える」ことが大切であると改めて感じた。問題行動を起こした児童生徒だけが生徒指導の対象ではなく、全ての児童生徒を対象に生徒指導を行っていきたい。
- ○私たち教員も時代に合わせて、アップデートしなければいけない。また、不登校の子供の目標は、学校に登校することではなく、将来的な社会的自立であることを忘れてはいけない。
- ○２軸３類４層構造を踏まえた生徒指導を大切にし、特に発達支持的な生徒指導を、学校内で共通理解を図りながら進めていきたい。

第２回　若手教員研修会　　８月２２日（火）

テーマ　「『特別の教科 道徳』その使命と役割　ー効果的な授業づくりのヒントー
講　師　　金沢工業大学　教授　白木 みどり　先生

多くの道徳読み物資料教材を作成しておられる白木みどり先生から、「特別の教科 道徳」について学びました。

「道徳は、人間としての生き方についての考えを深める時間、内面的資質を主体的に養っていく重要な時間である。子供との対話を楽しんでほしい」と力説されました。

また、教材研究に取り組む際の「図解ノート」を紹介され、参加者が実際に資料を基に考え、作業する時間もありました。

- ・友達の意見や考えを聴きながら、子供が主題を自分ごととして捉え、考えていけるようにする。
- ・子供たちから出てきた思いを大切にする。（子供のどんな意見や考えも大切にする。）
- ・話合いの基盤として、担任と子供とのよりよい関係性を築く。
- ・ねらいと評価の整合性を図り、中心発問を吟味する。
- ・子供たち全員が同じ土俵にのり、意欲が高まるような導入を工夫する。
- ・評価は、子供や保護者が成長を認め合えるものであってほしい。　…等々

参加者は、作業をしながら多くのことを学び取っていました。

「だれのための授業か！子供一人一人の考えや感じ方を大切に！」と、白木先生が何度も繰り返された言葉が、深く心に残りました。

＜参加者の声＞
- ○「図解ノート」は、すぐにでも活用できるものなので、それを用いて教材研究を行いたい。
- ○道徳の時間は「すべての子供を『はなまる』にできる」と聞いて、特別支援学級担任として励みになった。
- ○教師の思いを押し付けるのではなく、「子供の思いや考えを聴いて整理していく時間」と意識するだけで、道徳の授業に対する負担が少し減ったように思う。

「全国学力・学習状況調査結果の分析と活用」アラカルト研修会　　８月９日（水）
講師　　学力向上推進チーム　主任研究主事　高浦　智美　先生

小・中・義務教育学校教務主任会と連携し、学力向上推進チームから講師を招いて、「全国学力・学習状況調査結果の分析と活用」アラカルト研修会を開催しました。

教務主任には、各校の校務運営や教育課程の編成における要として、自校の調査結果から成果と課題を分析するとともに、必要な対策を講じていくための指針を示すという役割があります。

今回のアラカルト研修会では、「今、付けたい力と授業づくり　～全国学力・学習状況調査をヒントに～」を演題として、調査結果を基にした授業改善と、とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）を軸に講話をしていただきました。研修内容については、次の三つのテーマを柱として、資料と具体的な例を基に、分かりやすく説明してくださいました。

＜研修内容の概要＞

テーマ１「今、付けたい力」について

・学習指導要領の趣旨の確認を通じて、「資質・能力」の育成を目指し、その手段・方法として、主体的・対話的で深い学びの観点からの授業改善が求められていること。
・個別最適な学びと、協働的な学びを往還し、一体的に充実させることで、主体的・対話的で深い学びにつなげ、「資質・能力」の育成を図ること。
・とやま型学力向上プログラム（Ⅲ期）の推進では、問題発見・解決能力の育成のため、授業改善の視点１として、子供の問題（課題）意識を高め、子供たちが思考を活性化し、真剣に課題に立ち向かう姿を目指すこと。
・視点２として、子供が自己調整しながら学習を進められるようにすることが大切であること。

テーマ２「調査問題から考える授業づくり」について

・質問紙調査の結果と平均正答率のクロス集計から、「授業では課題の解決に向けて、自分で考え取り組んでいると回答した子供の方が、各教科の平均正答率が高い」ことが分かること。
・「学習した内容について分かった点、分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という自己調整を問う質問についても、同じ傾向がみられること。
・「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立て等を工夫して発表していましたか」という質問では、否定的な回答をしている子供の割合が高い一方で、学校質問紙では、否定的な回答の割合が低いことから、子供と教師の意識のずれに注目することで授業改善のヒントがあること。

テーマ３「結果分析を基にした学力向上の取組」について

・学力向上推進かわら版「あしすと第８２号」を基にした『我が校の学力・学習診断ソフト』の活用による分析と、ＰＤＣＡサイクルによる学力向上の取組例の紹介。

＊＊＊ 多くの方々に ご活用いただいています！ ＊＊＊

・夏季休業中には、多くの先生方にセンター所蔵の図書を読んでいただき、４月からの貸し出し冊数は、**76冊**（８月末現在）になりました。
・本年度、研修会でご指導いただいた**多田孝志先生、河村茂雄先生、玉置 崇先生**の図書を揃えてあります。また、市採用以外の**教科書**もありますので、指導案の作成等にご活用ください。
・これからもセンター所蔵図書や資料を積極的にご活用ください。（返却は封筒・棚入れで結構です。）